

2024年4月28日（復活節第4主日、B年）

牧師メッセージ

「わたしにつながっていなさい」

（ヨハネによる福音書 15:1-8）

司祭ヨセフ太田信三

東京聖テモテ教会のぶどうの木を眺めていると（東京諸聖徒教会のキウイもそうです）、もとの幹から自然と枝分かれをしていて、どこからがもとの幹で、どこからが枝なのか、はっきり判別できません。たしかに枝は幹から出るのはですが、それらが一体となって「木」になっているように見えます。パレスチナの人々にとってはぶどうは身近なものですから、イエスの今日の言葉はまさにそのようなぶどうの木のイメージとともに伝わったことでしょう。そして、イエスはそのイメージの通り、幹と枝が一体であるその全体をさして「わたしはぶどうの木である、あなたがたはその枝である」と言われたのです。たしかに、幹はイエスで枝は弟子たちですが、それらは分かちがたく一体で、互いに切り分けられるものではなく、イエスが弟子たちの中において、弟子たちもイエスの中にいるということです。そういう相互に交わり合い、関わり合い、存在し合う。それこそが、7節にある「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば」ということです。イエスがわたしたちのうちに留まり、わたしたちがイエスに留まっている、ということです。

「はじめに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と始まるように、ヨハネ福音書においてイエスは神の言であり、イエスの言葉は子なる神としてのイエスそのものです。ですから、イエスに留まるとはイエスの言葉＝み言葉に留まるということです。そして、イエスが弟子たちの内にいるとは、イエスの言葉が弟子たちの内にある、ということです。ですからイエスの言葉、み言葉に留まるなら、わたしたちはイエスに留まることになり、イエスと神との交わりに迎えられます。それは、み言葉を眺めて理解しようとするのではなく、ぶどうの木の枝と幹のように、み言葉がわたしたちの内にあり、わたしたち自身の存在もまたみ言葉の内に溶け出していく、み言葉と生身の交わりをする、ということです。ヨハネによる福音書14章では、イエスがご自分が天に昇るのは、わたしたちのために「住むところ」を用意しに行くためだ、と言います。この「住むところ」という単語の語源を探っていくと、「住むところ」とは、「わたしたちが本来のあり方を失うことのないところ」という意味を見出すことができます。その場所こそ、イエスと相互に分かちがたく共にいる場所、天の国です。イエスは、そこにわたしたちを迎え入れるために天に昇られるのです。しかしその場所は、死んでから迎えられるところではないことが今日の福音から分かります。今、イエスに留まるなら、今、わたしたちも「住むところ」に迎えられます。